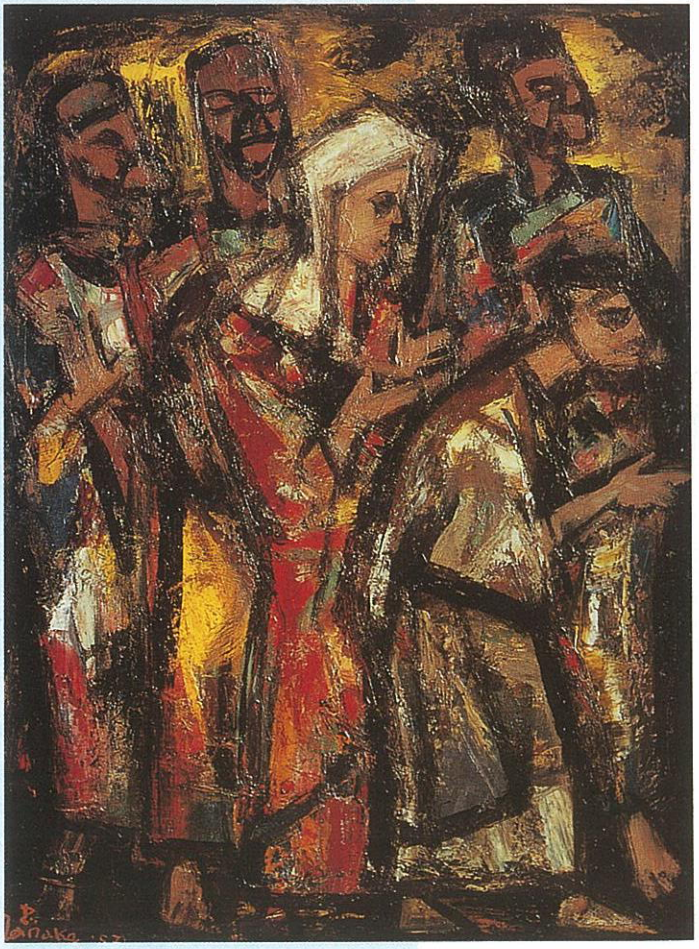
敬和学園大学と地域社会を結ぶコミュニケーション誌

KEIWA COLLEGE REPORT

第17号
〈JANUARY 1999〉
発行/敬和学園大学広報委員会



CLOSE UP
コンピュータークラッシュ
サンフォード・M・ゴールドステイン

小和田国連大使の講演／クリスマスの歓びと敬和

敬和学園大学・高等学校合同研修会

一九九八年度敬和祭／企業との就職懇談会

新発田市での公開講座／新潟市でも開講（関屋地区文学講座）

昨年10月23日に新発田市民文化会館で行われた小和田恒国連大使による敬和学園大学公開講座特別講演会の写真です。この講演会の開催に至るまでには、開演時刻が二転三転といった状態で、当初午後7時開演とご案内したことで、何人かの方々には多大なご迷惑をおかけいたしました。紙面を借りて深くお詫びいたします。

当日、新潟駅では駅長自らお出迎えいただき、特別の通路を通り、JR東日本新潟支社の正面玄関から車にご乗車になり、講演会場にも新発田警察署から警備のため数人がつめるなど、開学以来最大級の対応となりました。(本文中の報告記事をご覧下さい。)

ご多忙の中多くの方々にご参加いただき、心から御礼申し上げます。

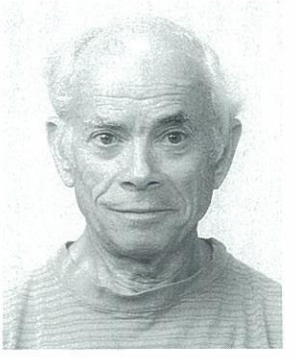
もくじ

コンピュータークラッシュ サンフォード・M・ゴールドステイン 1
小和田国連大使の講演……4
クリスマスの歓びと敬和……6
敬和学園大学・高等学校合同研修会……6
1998年度 敬和祭 久島公夫……7
公開講座報告……8
企業との就職懇談会……9
就職状況中間報告……9
卒業生宮君の快挙……10
大海教授226位に……10
関屋地区公民館公開講座……11
ゼミ紹介 菅野 浩……12
学生リトリートを振返って……12
学事予告……12
寄付者ご芳名……12
1999年度入試始まる……13

〈表紙〉田中忠雄「主の復活を信じる人びと」

コンピュータークラッシュ

サンフォード・M・ゴールドステイン



先週は、実におぞましい一週間であった。それは十月の某日、私は、日本語の読解力に磨きをかけねばとの思いから、コンピューターに向かって日本語の勉強にとり組んでいた。最近、即座に読める漢字の数が減り気味なので、日本語学習用のソフトウェアの助けを借りて、漢字力を鍛えようという目論みだった。「おとこ」、「かわ」、「さとり」などといった簡単なものからスタートして練習を続けていくうちに、突然、「にほんじん」という言葉が、私を窮地に陥れた。その漢字がどうしても画面に現れないのだ。「にっぽんじん」で打ってみたが、やはり出てこない。「ひ(日)」を打ってみたが、それでもだめだった。「日本人」にたどりつくための秘策を懸命に考えてみたのだが、そのような単純な言葉でさえも、もう私の手に負えない状態になっていた。

その言葉と格闘しているうちに、二十分が過ぎた。ふと見ると、コンピューターのマウスポインターが消えていて、コンピューターを切ることができなくなってしまっていた。やむなく、私は、手持ちの「超初心者のためのコンピューター」という本が禁じているやり方で、コンピューターを切った。コンピューターの裏側についているスイッチをオフにしたのだ。再びオンにしてみると、つつがなくコンピューターは作動した。そこで、日本語学習メニューに戻り、さきほど取り逃がした「にほんじん」に再チャレンジした。事態は変わらず、私は前と同様の苦しみを味わった。そして、また同じ方法でスイッチを切った。「超初心者のためのコンピューター」が言うところの禁じ手中の禁じ手を再び使ってしまったことになる。おそらく、私のしつこさがすべての災いのもとであったのだろう。三回目を試みたとき、画面に大きなクエスチョンマークが点滅していた。本来ならば、マッキントッシュのロゴが現れるはずの場所にである。私は恐くなった。そんな大きなクエスチョンマークが点滅しているのを見たことは今だかつてなかった。

私はあわててアメリカ人の知人に電話をした。彼は、私のコンピューターを取りつけてくれた人物である。私は、彼のことを「コンピュータージーニアス」と呼んでいた。これまでもたびたび、私のコンピューターに問題が起きたときは、助けを仰いでいた。ところが、何と彼はアメリカに帰ってしまっており、もう二度と日本には戻らないということがわかった。

さらなる私の悲話は、手短にまとめると、近くのコンピューターショップにこのコンピューターを私が持ちこんだあとに、そして、敬和の二人の同僚にノウハウを尋ねたあとに、さらに、新潟マッキントッシュ・コンピューターセンターにようやくたどり着いた(北嶋先生のお骨折りにより)あとに締めくくられる。私は、かように告げられた。このコンピューターはもはや動かない。壊れており、このままでは使い道がないと。七万七千円を出せば修理が利くらしかったが、次のことも同様に告げられた。すべての内蔵されているプログラムが失われたと。つまり、私が保存しておいた試験や課題文書、さらには、小説、演劇、短歌の類が一挙に失われたのである。フロッピーディスクに、注意深くしまいこんでおいた

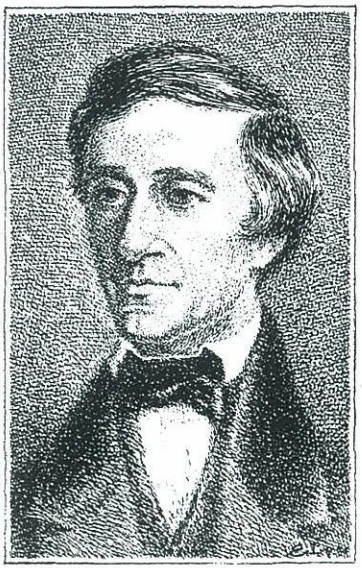
ものだけは別だったが。

お察しのとおり、私は唖然とし、呆然とした。しかし、公衆の面前で、悲しい顔をするわけにもいくまい。外国人にだって、タテマエは身についているものだ。うちひしがれて家に戻ってから、失われたコンピューターを、そして、このような事態が引き起こされた不運をしみじみと嘆き悲しんだ。私は、まさに犯罪者の心境だった。私に罪はなかったと思う。私は、すべての責任を、「日本人」という漢字になすりつけたかった。日本語は、四十五年にも及ぶ日本との長いつきあいの中で得た恩恵の一つである。だがその日本語が、私のコンピューターの息の音を止めて私を打ちのめした。今や堂々と私に勝ち誇っている。私は、隅っこで小さくなって死んでしまいたい気がした。その晩作った野菜料理では、とうてい私の心を癒せなかった。オレンジでさえ、苦々しい味がした。

この一件のせいで、その週のアメリカ文学史の講義は、ソローを取りあげることにした。前の週にソローの章は読んであった。また、この悲惨な出来事のあとでもう一度読み返したので、ソローの思想は私の頭の中に実に生き生きと残っていた。ソローだったら、この苦しみにあえぐ私に批判的眼差しを向けるかもしれないということにふと気づいて、私は愕然とした。『ウォールデン（邦題・森の生活）』という彼のエッセイは、質素な生活の価値の深さを思い起こさせてくれる。多くのものを欲し求める私たちに対して、ソローはある偉大な預言者同様、生き方を簡素化すべきだと説いた。食べ物や、お皿にいたるまでも。一日三回の食事を一回に、一〇〇枚のお皿を五枚に減らそうと、ソローは詠った。さらに、私たちの生活は、ドイツ連邦（ビスマルクが統一する前のドイツ）の如く、多種多様な混乱によって、終始、境界線が動きつづけるものだと彼は指摘した。

私は、コンピューターに依存しすぎていたのであろうか。しかし、それにはそれだけの理由がある。敬和で八時間の労働を終え、アパートに帰宅の足を踏み入れた時に、私の疲れをたびたび癒してくれたのがそこにあるコンピューターだった。簡単に手紙をやり取りし、簡単に課題問題の作成をし、簡単に私にまつわる過去の記録をひきだせるようにと置いてあったものだ。ただただスタートボタンを押せば、すぐさま私は彼の主人であった。

現代社会がコンピューターを絶対的に必要としているのは周知の事実である。先日、コンピューターの故障で為替相場の取り引きが数時間停止されたときは、緊急体制がしかれた。問題がすべて解決するまでは、銀行や、大企業、個人投資家をパニックに陥らせる一大事が、いつ起きてもおかしくない。西暦二〇〇〇年が来ると、食糧不足や、電話回線の混乱、流通システムの損壊による世界的な騒動が起こると憂えるアメリカ人もいる。巨大企業のコンピューターが、プログラムの日付を一九九九年十二月三十一日から輝ける新世紀第一日目の数字に移行できないというのがその根拠である。ある教会は、会員に来たるべき「二〇〇〇年」大異変に備えるようにとのお触れを出した。また、不足が予想される食料や物資を今からせっせと備蓄しているアメリカ人もいるらしい。


HENRY DAVID THOREAU

草葉の陰でソローがほくそえんでいるわけでもなかろう。彼は常に人類に対して「静なる絶望の人生」を送らないようにとの警告を発し続けた。ソローは超越主義者の中でも、また最たる現実主義者、そして、自主独立の人間だった。私は、自分がいかに自主独立からかけ離れた状態にあったかを思い知らされた。私のコンピューターが、あらゆる私の必要を満たしてくれるおかげで、逆に私を蹂躙していたことに気づいたのである。自分がコンピューターにそこまで依存していたのかと思うと、突然苦痛が走った。私は、自分本来の自立した姿を呼び覚ましたかった。機械が我が身に重くのしかかるのは、もうご免蒙りたいものだ。それにしても、私にせよ、世の中にせよ、何と反ソロー的になってしまったことか。ソローの

並外れた生命力と独立心に思いを馳せると、一つの考えが浮かんできた。ソローの人生におけるある一夜の出来事が、その後に続く世界史を大きく塗り替えることになったのではないか。それは、ソローが人頭税一ドル五〇セントの納入を拒否した咎で刑務所入りした晩である。彼は人頭税の納入（マサチューセッツ州住民の義務だった）を六年間無視していた。マサチューセッツ州は、当時奴隷制を擁護しており、ソローは自分の税金が、奴隷制という不正かつ反民主の制度を支えるのに使われることが我慢ならなかった。その一晩の体験から、ソローは現代史の流れを変えるエッセイを創出した。ソローの『市民的不服従』を読んだガンジーは、やがてインドの独立に向けて立ち上がった。さらに、このエッセイはマーチン・ルーサー・キングを、アラバマ州はじめ全アメリカで搾取されていたアフリカ系アメリカ人の解放に向けて導いた。

私は、自分がコンピューターという半神半人のシステムから解き放たれた新しいゴールドステインになるのを夢に見た。するとエネルギーが大きく波打って私に押し寄せてくるのを感じた。道理もへったくれもない、何ともおかしなエネルギーであったのはいたしかたないとして。

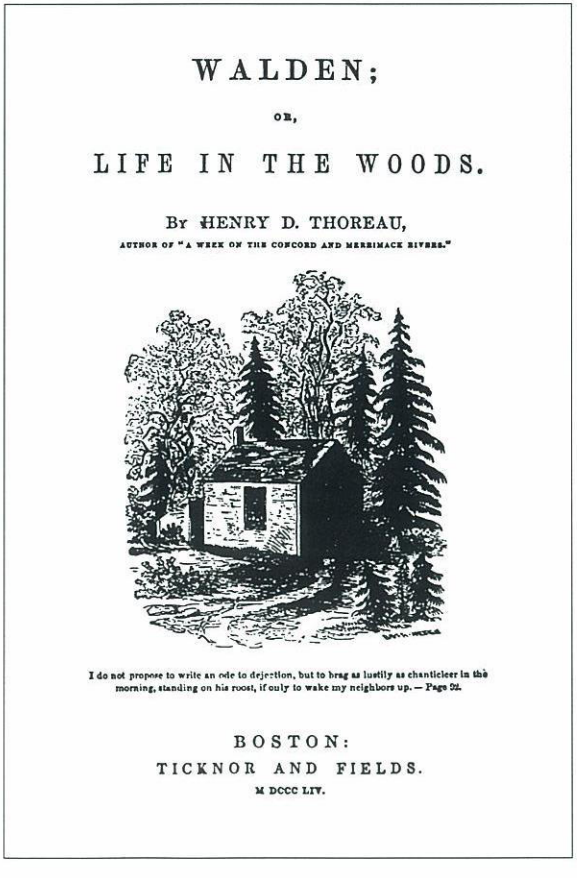
コンピューターが修復不可能であると知った翌日、敬和へ向かう電車の中で私は次の短歌をノートに記した。

壊れたる
コンピューターの
傷深く
ウォールデン池の
ソローし思ほゆ
from the sharp wounds
of my crashed
frozen computer,
an image of Thoreau
bathing in Walden Pond...

（訳・英語英米文学科講師　中村義実）

（注）ゴールドステイン教授は、英語英米文学科の教授で、アメリカ文学史を担当しています。

Title page, Henry Thorean,
Walden, first edition.



WALDEN;

OR,

LIFE IN THE WOODS.

By HENRY D. THOREAU,

AUTHOR OF "A WEEK ON THE CONCORD AND MERRIMACK RIVERS."

I do not propose to write an ode to dejection, but to brag as lustily as chanticleer in the morning, standing on his roost, if only to wake my neighbors up. — Page 92.

BOSTON:
TICKNOR AND FIELDS.
M DCCC LIV.

RESISTANCE TO CIVIL GOVERNMENT[215]

(CIVIL DISOBEDIENCE)

I heartily accept the motto,—"That government is best which governs least;" and I should like to see it acted up to more rapidly and systematically. Carried out, it finally amounts to this, which also I believe,—"That government is best which governs not at all;" and when men are prepared for it, that will be the kind of government which they will have. Government is at best but an expedient; but most governments are usually, and all governments are sometimes, inexpedient. The objections which have been brought against a standing army, and they are many and weighty, and deserve to prevail, may also at last be brought against a standing government. The standing army is only an arm of the standing government. The government itself, which is only the mode which the people have chosen to execute their will, is equally liable to be abused and perverted before the people can act through it. Witness the present Mexican war, the work of comparatively a few individuals using the standing government as their tool; for, in the outset, the people would not have consented to this measure.

小和田国連大使の講演

学長　北垣宗治

敬和学園大学の招きに応じて、去る十月二十三日、小和田恒（ひさし）国連大使が新発田で講演されました。本学の学生九十人を含む八百八十五人が、新発田市民文化会館の会場で大使の話に耳を傾けました。これは大使の帰国後最初の講演であり、しかも国連大使としては最後の講演でした。

小和田さんは父上が旧制新発田中学の教頭をしておられた一九三二年九月に、新発田市の清水谷（しみずだに）で生まれた方です。新発田の名園、清水園の入口に近い場所に、五年前に「雅子妃殿下御父上誕生の地」という木の標識がハマナスの潅木に囲まれて立てられました。小和田さんは二歳のとき父上の次の任地である高田に移り高田で育たれました。高田高校から東大に進み、外交官試験にパスし、外務省から英国のケンブリッジ大学に留学。その後アメリカ、ソ連等での外交官生活、外務省の条約局長、外務次官等をへて、一九九四年三月、国連大使に就任、安保理という国際的桧舞台で活躍してこられました。ご自分の生まれた場所を見るのは初めてだということでした。

小和田講演の背景

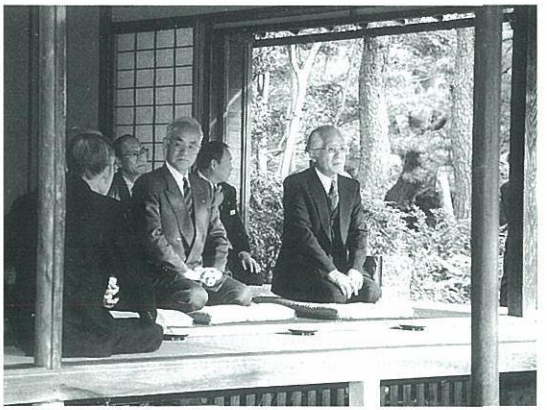
私は三年ほど前、新潟市で小和田大使の講演を聞いたことがありました。講演の後で大使に、お生まれになった新発田に敬和学園大学という大学ができているので、機会があればぜひその大学で講演をして下さるようにとお願いしました。よい機会があれば参りましょうとの約束を頂きました。

九月の末にニューヨークの国連から私宛てに小和田さんのファックスが届きました。十月二十四日に村上での行事に出席するので、前日であればお役に立てると思います、とありました。そこでただちにファックスを国連あてに送り、ぜひとも二十三日（金）の午後七時から八時半までということでお願いしたい、講演の題は「危機の時代における国連外交」ということでいかがでしょうか、と書き添えました。

日が切迫するにつれて、少し不安になってきました。金曜の晩には大学の公開講座が行われています。同じ時間に敬和が二つの講演会をするわけにはいきません。予定ではその晩は中村義実講師が「町（街）としてのワシントン」という講義をすることになっていました。そこで中村先生に十月二十三日の講義を十一月二十日に延ばして頂くようお願いしたところ快く承諾して頂きました。これで小和田講演は敬和の公開講座の特別講演という形をとることになりました。しかし、収容人員三百という新発田市生涯学習センターが満員になったらどうするか、それが心配でした。

さいわい、この特別講演には新発田市と生涯学習公社が共催者になって下さいました。おかげでその日は新発田市民文化会館を会場として確保できました。

心配がもっと具体的なかたちをとったのは、藤倉事務局長が村上市と連絡をとってからのことでした。村上市は皇太子のご成婚を記念して、サケの観察設備を作ったの



石崎邸の泉石荘で庭園を観賞しながらくつろぐ小和田国連大使

で、それのオープニングに小和田大使を主賓としてお招きしていたのでした。大使は村上の式後、東京で結婚式に出席するためすぐに帰られる予定であり、そのため金曜日の晩に村上市は大使の歓迎晩餐会を予定していました。その大切な時間を新発田に取られるのは困るというのです。敬和としては小和田講演を広告するにあたり、先ず時間をきめる必要がありました。

私はついに思い余って小和田さんに電話し、村上と新発田の間で意見の相違をきたしていることを申し上げました。小和田さんの返事は「日程はどうか新発田と村上の間で解決して下さい。どうしても折り合いがつかないようなら、私は新発田にも、村上にも参りません」と言われました。来てもらえなければ元も子もなくなるわけですから、私はあわてて、「ご日程については責任をもって調整しますので、ぜひともいらしてください」と言って、電話を切りました。そこでついに、敬和としては、金曜日の夕方四時から五時半までに講演をお願いすることをきめ、講演後に大使を村上までお送りすることにしたのです。

後で思うと、これは正解でした。藤倉局長はじめ関係者は四百人入れば成功とふんでいました。それが九百人近くの入りとなったのですから、大成功だったというべきでしょう。

奇しくも十月二十三日は、小和田さんにとって国連大使としての任期の最後の日でした。その記念すべき日を、生まれた町の新発田で講演なさる、そういう廻り合わせとなったのです。講演に先立ち、志まやで大学主催の歓迎昼食会を開催しました。両学科長、教務部長、オレンジ会の富樫会長、そして父上の小和田先生から国語漢文を習ったという市民お二人にも出席して頂きました。小和田さんは亡き父上についてのいろいろなエピソードを聞いて、感銘深かったようです。それからご本人の生まれたあたりをご案内し、ついで清水園、足軽長屋、蕗谷虹児記念館をへて、講演会場に入って頂きました。

志まやにおける小和田大使歓迎昼食会のあとで〈後列〉菅野、松崎、山田、藤倉、鈴木、菅原
〈前列〉岩村、富樫、小和田、北垣、高沢、古屋

国連に対する私たちの責任

講演の口調は大学教授のそれであり、しかも平易に、諄々と説かれる姿は、聴衆を引きつけました。国連の成り立ちから説き起こして現状に及び、問題点を指摘し、日本のかかわりかたなどを説明していかれました。

冷戦が終わり、米ソの二極構造が崩壊したいま、武力だけでは平和の維持が出来ないこと、エイズや麻薬、環境といった問題では、世界的な組織の中での話し合いが必要であること、国際的に対応しなければならない問題が多くなってきていることなどをあげつつ、国連のこれからの役割を強調されました。

また日本と国連のかかわりについては、国際秩序をみこしに例え、日本は国際社会の重要な一員であること、金は出すがみこしを担ぐのは嫌では困るのであり、傍観者的態度は許されないこと、みんなが一緒になって国際秩序というみこしを担ぐべきことを訴えられました。

つい十月までコロンビア大学とニューヨーク大学で講義をしてこられただけあって講義には質問がつきもの、というお考えから、質問をどうぞ、ということになりました。二人の質問者に対して、丁重に、わかりやすく答えられる姿に聴衆の多くは感銘を受けたに相違ありません。敬和を代表して上野敦子さんが花束を贈呈しました。小和田さんから私あてに頂いた礼状のなかに、「これからも御縁があろうかと存じます」とありました。かつて東大やハーヴァード大学の法律の大学院で講義され、著書もある優秀な学者としての小和田さんには、時折「故郷」の大学を訪ねて頂くつもりです。

敬和学園大学・高等学校合同研修会開催

昨年十二月十九日(土)敬和学園高等学校のチャペルにおいて、大学・高等学校合同クリスマス研修会が開催されました。これは、同一法人に勤務する教職員が、年に一回一堂に会し、一貫教育を基盤とする「敬和の教育」について語り合うことを目的とし、一九九二年から毎年開催されている研修会です。当日大学の教職員三十一名、高等学校の教職員六十五名が今年竣工したチャペルに集合しました。大学の教職員のほとんどは普段高等学校を訪問する機会がないので、この日初めてチャペルを見ることになりましたが、その素晴らしさに感動していました。午前十時から延原宗教部長の司会によりクリスマス礼拝が行われ、北垣学長から「最大の不快語」と題し、私にとって「最大の不快語」は、特にヨハネ伝に多く使われている「真理」という言葉である。それは、迫害をうけている人や苦しんでいる人を忘れている時、キリスト教の「真理」は、私を激しく責め立てるからである。キリスト教の「真理」は、愛に対し一層敏感であり、安易な道よりも厳しい道を選べと教えている。自己中心的に生きている時、「真理」は私を責め立ててやまない。私たちは自分が罪人であることを認め、イエスをキリストとして受け入れることによってしか、救われようがない。イエスが今日私たちの心の中に誕生して下さるよう祈りたい、との内容の説教をお聞きしました。

その後引き続き研修会に入り、今年度末で退職される高等学校の鈴木孝二先生から、「敬和学園高等学校三十年の教育を振り返って」と題し、発題がありました。

先生は高等学校開校後四年目から国語科の教師として教鞭を執ってこられました。その二十七年間の敬和に捧げた熱意と、様々な困難な問題に傾注された情熱を歴史に沿ってお話しされ、最後に、大学と高等学校が同一法人であることを確認し、もっと強いスクラムを組む必要がある。そのために、大学の教員が高等学校で講義をしたり、高等学校の教員が大学の授業を受けるような交流が生まれることを願っているとお話しになりました。

その後会場を食堂に移し、給食の職員の手作りによる昼食をいただきながら、和やかな懇談のひとときを過ごすことができました。

(総務課長　長澤)

クリスマスの歓びと敬和

宗教部長　延原時行

極東・日本のいちばん新しいキリスト教主義大学「敬和」にとってのクリスマスの意義、その歓びは、ジングル・ベルの鳴る市内のデパートにとっての商業クリスマスの価値とはちがう。敬和にとっては、クリスマス行事は、日本の地にキリスト教的文明形成原理を根づかせ、同時に欧米キリスト教世界(一九九一年のソ連邦崩壊と共に文明のグローバル・スタンダードの提供者の自信をのぞかせる広大な文明圏に対して「日本」を弁護するという、キリスト教主義大学運動の焦点なのだ。

十二月十八日(金)は稀に見る快晴。まず午前中は、本年度より活動し始めたブラスバンド部と合唱部とで例年のように特別養護老人ホーム二の丸をキャロリング慰問した。午後三時より大学講堂で恒例の濁火礼拝。松崎洋子、菅野浩両学科長によって、点火された。参加者の持つローソク九十三本が会堂を埋め、勝又圭介君の伴奏で「きよしこの夜」の歌声が高らかに降誕の主を賛える。矢嶋直規講師「ルカ伝二章朗読、延原宗教部長の祈禱ののち、聖歌隊合唱。そして北垣学長のクリスマス・メッセージである。

今から三百三十三年前、一六六五年の英国の惨状を英文学者の蘊蓄を傾けて描写される。黒死病と呼ばれたペストが猖獗をきわめ、ロンドンでは五十万の人口の内、七万人が死んだという。前年のオランダとの戦争と九月の大火がさらに絶望感を強めた。と、詩人ジョン・ドライデンが彗星のように現われ『驚異の年』(*Annus Mirabilis*)を発表、「艱難により祝福を与える神」を称えた。一九九九年の不吉な年の日本も同様なのだ!

「クリスマスを支配しているのは、暗黒でした。ローソクをともし御子イエスの誕生を祝うのは、イエスこそは、暗やみの中に照り輝いた光であったからです。」

このメッセージと共に県立新発田病院にバスで赴き、百名の患者さんを前にブラスバンドの熱烈演奏三曲、キャロリングの大合唱。その後のパーティーでは若林洋子、鈴木喜香両君の司会で敬和の「和」は満ちるのでした。

一九九八年度 敬和祭報告

久島公夫

去る十一月七、八日に、学生の自主活動としての最大イベントである第八回敬和祭が行われました。今年もこの時期としては良い天候に恵まれ、沢山の高校生、小、中学生、そして地域の方々に足を運んでいただき盛況のうちに終わることができました。七日朝、まだ屋台の準備も出来ていない時に、お茶会に参加される数名の和服姿の女性が来場されて敬和祭が始まりました。屋台の準備が整う頃になると、来場者も多くなり広場も賑わってきました。屋台では、今年限りで閉店するという老舗の「とやまんカレー」をはじめ、サークルや一年生の各クラスによっていろいろなメニューの食品が提供されました。今年は一連の毒物混入事件があったので、食品の調理や管理については例年にも増して細心の注意を払わなくてはなりませんでしたが、屋台に参加した学生諸君の協力により無事終了することができました。栄光館の二、三階を中心に、体育館も使われてゼミ企画が行われました。今年は北垣学長自ら「北垣学長の部屋」を設けてゼミ企画に参加されたのをはじめ、八つのゼミによる日頃の活動成果の発表が行われ、これまでにない充実したゼミ企画となりました。北垣学長のお話によると、七日だけで九十数人の方が来室されたということですので、多くの皆様に本学で行っているゼミ活動の一端を知って頂けたのではないかと思います。七日午後、演劇部の公演がはじめて体育館のステージを使って行われました。なにしろフロアーが広いうえに、五つの企画が同時進行しており、体育館に観客が集まるのかどうか心配でしたが、開演の頃には用意したイスはほとんど埋まり、熱心な観客の注視の中で熱い演技が行われました。一日目は、THE BLAST BACKBONEと三浦組のライブで大いに盛り上がって幕を閉じました。

八日は前夜の雨の影響もあり、来場者の出足は鈍かったのですが、その中で、大勢の小学生の諸君が、朝早くからお父さんやお母さんと一緒に体育館に急いでいました。体育館はミニ四駆大会の会場になっており、外の広場がまだ閑散としている時、体育館の中は床に工具を広げ、お父さんと一緒にミニ四駆の調整に没頭する子供たちの姿でいっぱいでした。このように、大勢の子供たちや、保護者の方に本学の様子を知っていただくことは、地域との交流の一つのありかたとして意義あるものと思われます。午後のスタートでは、新発田高校のブラスバンドに本学の部員が加わり、華やかな演奏が行われて祭りのムードが盛り上がりました。オレンジホールで行われた学生ライブでは沢山のグループが日頃の練習成果を発表し、文化系サークルの活動も活発になってきたことを感じさせました。サークル企画には、この他にもボランティアサークル、チアリーダー部など多くの参加があり、自主活動をアピールしてくれました。敬和祭はキャンプファイアーで幕を閉じましたが、ここにも多くの参加者があり、火を囲んで祭りの終わりを惜しんでいました。このように、最後まで盛況のうちに、無事敬和祭を終わることができたのは、三富明彦君を委員長とする敬和祭実行委員の皆さんの、夏休みも返上して連日遅くまで頑張った努力と、企画、運営に参加してくれた学生諸君の協力が実を結んだものだと思います。本当にご苦労さまでした。来年度の学生諸君には、これまで蓄積されてきたものにさらに改善を加え、より充実した敬和祭にしてくれることを期待しています。最後になりましたが、敬和祭のために、沢山の協賛を頂きました企業各位、お忙しい中ご来場頂きました地域の方々に厚くお礼申し上げます。また、ご支援、ご協力を頂きました後援会、教職員の皆様に深く感謝申し上げます。

8年間、敬和祭を盛り上げた「とやまんカレー」

◆公開講座報告◆

参加者の日誌をもって報告します。スペースの関係で、一部割愛させていただきました。

受講者日誌記録より

九月十八日　文学における知の探求

（講師・北垣宗治）

・「冥府めぐりの伝統」…一生懸命聞きましたが私は若い日から今まで聖書以外の西洋の文学に学び親しんだことがなかったので、難しすぎて良く理解できず大変残念に思いました。

・『おじいちゃん地獄って本当にあるの？』このような孫の無邪気な質問にあなたはどう答えますか。…子供も孫もない私には、無邪気な質問にとまどいますが「神様（イエス様）を信じている人に地獄はないよ」と答えます。

九月二十五日　環境と倫理

（講師・矢嶋直規）

地球の温暖化や異常気象等の環境問題が最近頻繁に取り上げられています。大変なことだと思っても身近な問題として深く考えることもありませんでした。今回の講座を聞いて、一人ひとりが倫理的視点を持って取り組んでいかなければならない重要な問題であることがよく分かりました。とかく、自分にかかわりなければとか、自分さえよければと安易な考えで毎日を過ごしてしまいがちですが、自分の生き方を見つめ直さなければと反省させられました。

地球に住まわせてもらっている一人の人間として小さな力ですが努力して行きたいものです。

十月二日　二十一世紀の地球環境を考える

（講師・菅野　浩）

テレビ新聞雑誌等で報道されている事であっても、私どもはただ漠然と頭には入っているものをこうしてまとめてお話して頂くと、改めて二十一世紀はどうなるのか考えさせられます。

我々一人ひとりがそして日本が世界の人々と連携して努力していかなければ人類は存続し得ない事を痛感いたしました。私は残り少ない人生ですが子孫のためにも若い人々の知恵をお借りして、私自身は出来る事から一日一日を考えながら過ごしていきたいと思いました。

十月十六日　新発田藩と会津藩～恩讐を超えた交わり

（講師・星　亮一）

私は軍隊生活のなかで、九州人、広島人、名古屋人と軍隊生活をいたしました。その中で彼等の物事に対する考え方、心の中が理解できない事が多々ありました。今回の講座で、それはその人たちの生まれ育った土地の風土や文化によることが分かりました。九州、広島人は気候が温暖で革命的で「ハッタリ」がうまい。名古屋人は毎日経済的な事で明け暮れているためか、まわりの状況を察するのに繁くである。越後人は我が身に迫る状況に対してその時々に応じて行動する者が多い。いかに生まれ育った土地の風土や文化、歴史がその人の人生に関係しているか知ることが出来ました。これからの人生の参考にしたいと考えます。

十月三十日　世界人権宣言五十周年にあたり、あらためて人権の問題を考える

（講師・福王　守）

国際人権規約が自国の国内法のフィルタにかけて法律が実践されていない部分がある。現在また新しく時代、経済の動向が不安定になり国内の法律をもう一度勉強していかないと自分で新聞を読み取ることが難しいと思う。

十一月六日　インターネットの役割～グローバル・ブレイン

（講師・安藤司文）

日頃インターネット、電子マネー（空間的価値、移動とかネットワーク、クレジット等）について聞かれますが、私どもの年齢層にはコンピュータ・アレルギーもあって非常に難しく、また講義を受ける機会もありません。本日の講義を受けてその仕組み、内容を理解することによって、面白くなり少しは分かってきたと思います。講義の後半に介護ロボットの開発等についてお話がありましたが、今後高齢化時代を迎えるにあたり、誰もが関心を寄せなくてはと思います。

十一月十三日　中国におけるイスラーム文化

（講師・松本ますみ）

・中国は多民族国家であり、イスラーム教徒も新疆、寧夏、甘粛、陝西、雲南など内陸部だけでなく、沿海地方にも住んでいる。

・イスラーム教を回教、清真教とも呼ぶ。イスラーム教徒は五功の実践者として、正直を旨とし、唯一神アッラーを信仰している。中国イスラームには旧教、新教、新新教の別がある。

・現在の中国は政治的求心力と遠心力のはざまの中でゆれている。イスラーム原理主義者によるといわれる新疆独立運動も無視できない状況にある。

総括的な感想…講習には、非常に興味を持てたが講習生による質問を聞いていると内容の濃い発言が目立ち私などはとても一般水準に達していないことを痛感した。

また、標題のような講習内容ですと、もう少し時間をかけてほしいと思います。

十一月二十日　町（街）としてのワシントン

（講師・中村義実）

アメリカの町づくりについての基本的哲学から始まって、現在のワシントンの実情にいたるまで平易に解りやすくお話になりました。アメリカでは南北の通りをアベニュー、東西の通りをストリートに区別していると思っていましたが地図を見て必ずしもそうでないと分かりました。

また、ポトマック河畔には日本から贈った桜三千本があるということ、これのお返しにアメリカ花ミヅキを貰ったと聞いています。日本の首都圏機能の移転がいわれている今日、アメリカの町づくりについては大いに参考になることがあると思いました。

「企業との就職懇談会」報告

恒例の本学と企業の人事担当者との「就職懇談会」が去る十一月十八日(水)、ホテル新潟で開催されました。年末を控えて業務多忙のなか、しかも初雪の降る天候にもかかわらず、一〇四社、一一八名の人事担当者と大学側からは北垣学長、斎藤就職委員長をはじめ各就職委員、一般教職員、後援会役員など約三〇名が出席して取り行われました。

まず、北垣学長が挨拶に立ち、本年度の採用のお礼を述べるとともに、来年度の就職戦線には県内の全大学が加わること、また深刻な不況もあり、今年以上に厳しいものとなることが予想されることから、本学の過去の実績や就職に対する取り組み方等につき、企業の皆様にご理解いただきたいと、強くアピールしました。

続いて、日本心理適性研究所主任研究員稲熊清一様の「二十一世紀に向けての採用方針、選考基準—求める人物像の実態を探る—」と題する講演があり、就職協定の廃止により変化する採用環境、特に学生の就職観、仕事観の変化により、自分のやりたいことが出来る企業を選択する傾向が強まって来たと指摘された。企業側にも、「何で就職するのか」を面接の場で問い、学生の問題発見能力・専門知識・業務処理能力や創造性などを採用の基準に置き、経営戦略につながる人材を採用しようとしている。また、企業のトップの役割もますます重要となっており、社長自らが面接試験の担当をつとめたりもしている。また、「城は石垣」を例に多様な人材の採用のため、いろいろな試験を行うようになってきたとの熱のこもった講演に対し、参加者は熱心に耳を傾けていました。

続いて斎藤就職委員長から、今年四月から委員長に就任した旨の就任挨拶・本年度の採用のおれと、まだ若干残っている就職未内定者への更なる採用のお願い、そして今まで以上に厳しい就職戦線を迎える現三年次生に対し、本年度に引き続いての採用のお願いをしました。また、資料に「求人票」を加え、来年に向けてより早い求人情報をいただきたく参加企業の皆様にお願いして、第一部を終了しました。

若干の休憩を挟んで行われた第二部では、新潟商工会議所中原理事様、また新発田商工会議所からは会頭メッセージより本学への益々の引き立てをお願いしたいとの大変有難いご挨拶をいただきました。続いて本学後援会石井副会長の乾杯で懇談会に移り、企業の人事担当者と就職委員及び教職員も加わり、今後の就職問題等について活発な意見交換を行いました。その後も和やかな懇談が続き、例年にも増して盛り上がり、来年度の就職に向けて大きな弾みが付いた懇談会でした。

石井富男敬和学園大学後援会副会長の乾杯

これも偏にこの会の運営にご協力いただきました教職員をはじめ後援会役員の皆様のお陰と深く感謝致しております。有難う御座いました。

(就職委員会・就職相談室)

就職状況中間報告

〝早い時期からの準備が大事!〟

今年度の就職戦線は、また超氷河期に逆戻りしました。すでに早い時期に内定を獲得し、残り少ない大学生活を有意義に送っている学生がいる反面、今でもリクルートスーツが脱げず就職活動に奔走している学生も少なからずおります。

今年は求人の絶対数が不足しているだけではなく、応募職種が限られるといった傾向にあります。特に四年制大学の女子の場合は、総合職が中心で、一般事務職の求人はほとんど皆無といってもよい状況です。これは、男女を問わず、賃金の高い四年制大卒者には附加価値の高い仕事をしてもらいたいといった傾向が強まってきていることによるものです。

来年度からは男女雇用機会均等法の改正により、採用試験で男女を分け隔てなく競わせるといった企業が多くなることは必至であり、女子学生にとっては厳しい就職環境になることを覚悟しなければなりません。

(就職相談室)

卒業生宮君の快挙

敬和学園大学を一九九七年三月に卒業して、大阪大学大学院の国際公共政策研究科博士前期課程で研鑽を積んでいた宮巍君はこのほど三井物産に就職が内定、来年四月からの新しい生活に備えつつ、修士論文の完成を急いでいます。同君は博士後期課程への進学を希望していましたが、家庭の事情を考慮して、母上に孝養を尽くす道を選ぶことになりました。同君は富士通、三和銀行、伊藤忠商事からも内定をもらい、丸紅と三菱商事の最終面接まで進んでいました。三井物産を選んだ理由として、「自分の力を十分に出し切って勝ち取ったものだという実感が強く、そして、人の個性を尊重するという、他社で感じられなかった社風にひかれ、入社を決意致しました」と述べています。

宮君は三井物産の東京本社勤務にきまったそうで、「これからは途上国の経済発展にかかわる仕事をしたいという夢が、物産での仕事を通じて実現できそうな気が致します」との抱負を寄せています。なお今年は大不況のせいで三井物産の採用人数は例年より少なく、一二九名だったそうです。内訳は、慶応約四十、早稲田約三十、東大約二十、京大と一橋合わせて約三十、阪大二、とのことです。

学生時代に敬和学園大学の図書館をもっともよく活用したのは宮君でした。図書館が開くと同時に入館し、閉まる時間まで図書館ですごしました。英語英米文学科でブロンデ先生の指導を受けながら、国際文化学科の大海教授のゼミにも入り、敬和の提供する一番よいものを、貪欲に学び取った留学生でした。四年間にわたり、夕方のきまった時間にホテル泉慶で働き、授業料と生活費の一部を稼ぎました。仕事はバーテンダーでしたから、カクテルは百種類以上作れますが、彼はアルコールをたしなむことなく、また誘惑にも負けませんでしたから、泉慶でも信頼されていました。

敬和にこのような卒業生がいることを学生諸君に知ってほしいし、特にまた留学生諸君には、そのような先輩の後に続いてほしいと念願しています。

大海教授二二六位に

朝日新聞社が発行する『大学ランキング99』では、「発言する日本の学者一一三四人」の中に、本学の大海宏教授が第二二六位に入りました。ちなみに敬省略で紹介すれば、一位は佐伯啓思（京大）、二位は竹中平蔵（慶応）、三位は宮脇淳（北海道大）ということで、二五位に河合隼雄（国際日本文化研究所）、三七位に江頭淳（大正大）、七六位に阿部謹也（一橋大）、一〇一位に猪口邦子（上智大）、一二五位に樺山紘一（東大）、一二三位に上野千鶴子（東大）。二二六位の大海先生より下には三三一位にG・クラーク（多摩大）、三四五位に蓮實重彦（東大）、八三六位に日野原重明（聖路加看護大）と続いています。

これは大海教授が主として『日本経済新聞』を中心に意欲的に執筆活動してこられたことによるものであり、先生の名前には必ず「敬和学園大学教授」という肩書きがついており、その都度、いわば敬和の宣伝をして頂いていることになります。

そのことは『大学ランキング99』の別の箇所にある「データベースに見る大学名の出現頻度」で、一位慶応、二位東大、三位一橋大の順で敬和学園大学が三五位に入っていることにも反映しています。全国に四年制大学が、国公私立を合わせて五九八校あることを思えば、これは大したことであります。

また「全国の高校長がつけた大学の〝通信簿〟」によれば「86年以降に設立された大学への評価」で、一位会津大、二位東京都立科学技術大、三位静岡県立大の順に大学名がならび、敬和学園大学は五一位でした。しかし敬和のあとにまだ二四大学が並んでいました。

こうしたランキングの表をみて一喜一憂することはばかげています。しかし、ランキングをまったく無視することもまた不遜のそしりを免れません。「たかがランキング、されどランキング」というのが結論として妥当かもしれません。

関屋地区公民館 公開講座報告

「地方の時代」という教育の上昇気流に乗って、新潟では一九九一年の本学の開学を皮切りに、五年間に五校が新設という大学開学ブームを呼んだ。この大学新設ラッシュで新潟は全国記録を樹立したことは別として、実学志向が高い、全国屈指の農業県である新潟県下に国立・私立の四年制大学が十二校を数えるまでになった。各大学は生き残りの道を探る時代になり、あらためて地域と大学の希薄な関係という欠点が浮き彫りにされてきている。地方の私立大学は何よりも「地域密着型」と「個性」を掲げて「大学冬の時代」を乗り切ろうとしている。みずからの殻をやぶって、周囲の社会に入りこみ、「地域へのサービス」ができる大学のみがこれから生き残るであろうと思われる。公開講座などを通じて地域との接点をつくることは重要な要素であると考える。

この講座は、多くの新潟地区公民館でもしばしば講師を勤められ、また本学での日本近代文学の講義を担当されている文芸評論家若月忠信先生の仲介により、この企画は実現したことをまず感謝したい。総合テーマを「世界の文学」として、青葉の繁げる五月下旬から計六回にわたって、プログラムに掲載のテーマと講師陣で臨んだ。新潟大学のお膝元で敬和学園大学と地域とをリンクする出前講座を開催できたのは愉快であった。

「北垣学長さんの『地域社会に大学を開放する』という広い心に打たれました。地方の私立大学は、地域に根をおろしてこそ存在意義があると思うのです。講師の先生方はこうした学長の考えを受けとめ、ほんとうに素人の一般の市井の方々に、懇切に文学の面白さを熱心に話してくれました」とある聴衆の方から寄せられた私信の中に書かれてある。また、元高校長で英米文学に造詣が深いTさんからは、「ブロンデさんの卓越した、格調の高い情熱溢れるお話は、聴衆の一人として、深い感銘を覚えました。フロイトの考え方の視点からのハムレットの性格、そして彼が心の世界から現実の世界へと揺れ動く一人の人間としてその悩める姿、そして多くの死を直視して思索の人より行動の人、新しい自由人になるという解釈は面白いと感じました」というコメントが寄せられた。

本講座は平日の昼間であるため、定員三十名ほどでしたが、聴衆の中には、中国人や本学の卒業生で、現在新潟大学の大学院に通う学生の姿もあった。講演後に「この度の講演は、もっともっと多くの方々に聴いてもらいたかったと思います」と声をかけて、敬和学園大学にエールをおくってくださる方がいて、心強く思った。

（英語英米文学科教授　北嶋藤郷）

●プログラム●

月日	内容	講師
5月20日	ロングフェローと小学唱歌	敬和学園大学長 北垣宗治さん
5月27日	レイモンド・カーヴァーの世界	敬和学園大学教授 松崎洋子さん
6月3日	坂口安吾と ブルーノ・タウトの「日本文化史観」	文芸評論家 若月忠信さん
6月10日	ゲーテの 「若きウェルテルの悩み」を読む	敬和学園大学助教授 桑原ヒサ子さん
6月17日	ハムレットの意味と死の意味	敬和学園大学教授 アラン・ブロンデさん ［通訳］敬和学園大学教授 北嶋藤郷さん
6月24日	ウィリアム・ゴールディングの 「通過儀礼」	敬和学園大学教授 伊藤豊治さん

ゼミ紹介

菅野　浩

私のゼミでは、〝生命科学と人間〟という問題をあつかっている。一年次の〝現代生化学入門〟という授業で生命科学の基礎を教えているが、ゼミでは生命科学の基礎的理解を通して生命科学と人間・社会との関わりを考えてみたい。そのような問題に関心をもつ十二名前後の学生が毎年本ゼミに参加している。

生命科学は現在種々の病気の治療や医薬の開発などをはじめ、バイオテクノロジーと呼ばれるいろいろな分野で貢献していることはよく知られているが、一方では遺伝子診断、受精卵操作、臓器移植などのような、生命倫理に関わる問題をはらむ先端技術が急速に展開されつつある。また地球環境問題の分野でも、いわゆる環境ホルモンをはじめたくさんの有毒性化学物質による汚染が最近問題視されてきた。

これらの諸問題について理解を深めるために、本ゼミでは、『生命科学と人間』と『生命科学から生命誌へ』（いずれも中村桂子著）という二冊の図書を使って輪読を行っている。順番にあたった学生は予習し、当日の説明に必要な資料は参考図書を調べて用意する。準備や話し方について気のついたことがあれば私の方から批評する。遺伝子、免疫、受精卵操作などについては追加講義を行っている。またＮＨＫ放映のビデオ（たとえば遺伝子診断の内外の現状）を教材に使うこともある。このほか、おりにふれて人生や就職などについて話すことも心がけている。

学生リトリートを振り返って

今年度の学生リトリートでは〈奇跡〉が起こった。学長、国際文化学科長、宗教部長、教務部長を含む五人の先生が、わずか七名の学生に対して、これまでの生涯をかけて獲得してきた人生の粋を注ぎ込むようにして、泊りがけで夜を徹して、学生生活について、人生について、自然の神秘について、そして信仰について語り合って下さったのだ。こんな事がいったい世界中のどの大学で起こり得るだろうか。私は教員として参加させていただきながら、このような特権を味わうことのできる学生達をほとんど羨望の眼差しで見つめていた。

北垣学長は、恒例の『学長大いに語る』において、ご両親の思い出と、そしてご自身の少年時代からの人生を振返っての信仰者としての人生観を語って下さった。今年度ゲスト参加して下さった菅野教授の、戦時中から、終戦直後にかけての波瀾万丈というべき東京帝国大学学生時代のお話、そして人生についての尊い教えは決して忘れ得ない。両先生に特に深い感謝を捧げするしだいである。延原教授、矢嶋講師、山田教授はそれぞれ開会、朝、閉会の礼拝説教を担当し、一同は感銘を分かち合った。

教員学生ともに、短い時が過ぎ去るのを惜しんでいた。このようなすばらしい機会が、心に問いを持つ敬和学園大学のすべての学生諸君に広く開かれていることを、より多くの学生に知ってもらいたい。

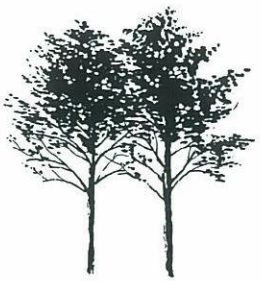
（国際文化学科講師　矢嶋直規）

学事予告

一月　十九日　後期講義終了
　　二十三日　学年末試験（～二月十日）
二月　十二日　春期休暇（～三月三十一日）
三月　二十日　卒業式
　　三十一日　学年終わり
四月　一日　学年始め
　　三日　入学式
　　八日　新入生歓迎公開学術講演会
　　前期講義開始

寄付者ご芳名

一般　北垣宗治②　片岡大作
　　新発田建設㈱　松澤郁子
　　大学後援会　オレンジ会
一九九五組　小野澤武晴　皆川　靖②
一九九六組　田中　淳　岩淵布紀子
　　渡邊美穂　本間清子
一九九七組　斎藤志保　奈良橋健太郎
　　塩崎香織　栗栖仲次
一九九八組　斉藤益生　船木良造
　　山口高貴　佐藤浩雄



一九九九年度

入学試験が始まりました

社会人学生をお迎えします

編入学試験を皮切りに、一九九九年度の入学試験が始まりました。

十月二十四日(金)に実施された編入学試験には、県内外から五名の受験生を迎え、小論文試験と面接試験の結果、全員が合格と判定されました。出身学校別の内訳は、短期大学の卒業(見込)者三名、四年制大学の在学生が二名となっています。短期大学の厳しい就職状況もあって、近年では短期大学の卒業(見込)者が四年制大学に編入学する事例が増えています。

また、関係法令の改正もあり、ごく近い将来には一定の基準を満たした専門学校からの編入学も可能となるでしょう。短大や専門学校などの卒業生を対象として、より高い教育を希望する人には大学の門戸が広く開かれている時代が間もなくやってきます。

十一月二十二日(日)には推薦入学試験と社会人入学試験が実施されました。推薦入学試験では学部全体で一〇一名の受験生を迎え、受験生は午前中の小論文試験と午後の面接試験に真剣な表情で臨んでいました。今年度の小論文試験は「みる」――「見る」「観る」「視る」「診る」「看る」などの漢字を当てはめることができますね――という言葉をめぐって各自の考えを論じてもらう問題でしたが、受験生はボランティア体験などの実際の経験を踏まえながら解答していました。

本学の推薦入試は小論文および面接試験の成績に加えて、「高校での活動も重視したい」という観点から、調査書および各種の資格や特別活動などを一定の基準で点数化して、総合的に合否を判定しています。近年は専門高校からの進学希望者が増加傾向にあり、今回も高校での取得資格を得点に結びつける事例が目立っていました。なお、高校での留学経験を持つ受験生がいたため、昨年度と同様に、受験生の不利にはならないように配慮いたしました。入学試験もずいぶん国際化してきたものです。この推薦入学試験については慎重な審議の結果、受験生全員が合格と判定されました。

さて、今年度は久しぶりに社会人の受験生をお迎えしました。社会人としてのこれまでの経験を生かしながら、より高度な学問を修めたいとお考えになっている方です。小論文試験および面接試験の結果、この社会人入学試験の受験生についても合格と判定されました。

一九九九年度最初の入学試験を終えましたが、年が明けますと本学を試験会場とした大学入試センター試験、外国人留学生入学試験、一般入学試験(A日程・B日程・C日程・センター入試)と入学試験が続きます。関係する教職員にとっては忙しい日々が続きますが、本学にふさわしい入学者をお迎えするため精一杯努力いたしますのでよろしくご支援の程をお願いいたします。

(入試室主幹　西村秀雄)

〈1999年度入学試験の結果(実施順)〉

入試区分	学科	募集人員	志願者数	志願倍率	受験者数	合格者数	実質倍率
編入学試験	英語英米文学科	若干名	3	—	3	3	1.0
	国際文化学科	若干名	2	—	2	3	1.0
推薦入学試験	英語英米文学科	45	61	1.4	61	61	1.0
	国際文化学科	45	40	0.9	40	40	1.0
社会人入学試験	英語英米文学科	若干名	—	—	—	—	—
	国際文化学科	若干名	1	—	1	1	1.0

FROM CAMPUS

キャンパス日誌

1998年 9月

25日　チャペル・アッセンブリー・アワー⑭
　説教　北垣宗治 学長「汝の敵を愛せよ」
30日　教授会、人事教授会

10月

2日　チャペル・アッセンブリー・アワー⑮
　説教　ヴァンダウェルフ
　　名誉文化博士（写真）
　「戦争と平和」
3日　敬和フォーラム
　発題　ヴァンダウェルフ 名誉文化博士
　「Genesis and Exodus:Foundation and Framework
　　for a Christian Liberal Arts Education」
7日　敬和フォーラム
　講師　田原嗣郎 教授「日本思想史研究の歴史と課題」
9日　チャペル・アッセンブリー・アワー⑯
　説教　延原時行 宗教部長「良寛と聖フランチェスコ」
　私の留学体験(夏期短期留学学生報告)
　国分彩子〈アングロ・コンチネンタル〉
　吉田桃子〈カリフォルニア州立大学サンバナディーノ校〉
　下谷春正〈ノースウェスタン大学〉
14日　教授会
16日　チャペル・アッセンブリー・アワー⑰
　説教　延原時行 宗教部長「性のモラル」
　講師　小野　哲 教授「空の世紀について」
　公開講座(新発田)（第4回）
　講師
　　歴史家 星 亮一 先生(写真)
　「新発田藩と会津藩
　　～ 恩讐を超えた交わり」

18日　英語技能検定試験 96人受験
23日　チャペル・アッセンブリー・アワー⑱
　講演　古屋安雄 国際基督教大学名誉教授
　「明日の世界と明日の大学」
　公開講座(新発田)（第5回）特別講演会
　講師　小和田 恆 国連大使
　「危機の時代における国連外交」
24日　編入学試験
27日　学園常務委員会
30日　チャペル・アッセンブリー・アワー⑲
　説教　延原時行 宗教部長「不幸の哲学者 シモーヌ・ヴェーユ」
　講師　渡辺幸二郎 新発田建設社長「21世紀は知性の時代」
　公開講座(新発田)（第6回）
　講師　福王 守 専任講師
　「世界人権宣言五十周年にあたり、
　　あらためて人権の問題を考える」

11月

2日　事務職員　小端康弘 採用辞令交付
4日　教授会
6日　チャペル・アッセンブリー・アワー⑳
　講演　梶原 寿 名古屋学院大学教授「〈にもかかわらず〉の夢」
　公開講座(新発田)（第7回）
　講師　安藤司文 教授
　「インターネットの役割 ～ グローバル・ブレイン」
7日　敬和祭（～8日まで）
8日　同窓会総会／新潟東映ホテル
11日　敬和フォーラム
　講師　益谷 真 助教授「大学生の学習と素朴心理」
13日　チャペル・アッセンブリー・アワー㉑
　説教　延原時行 宗教部長
　「マルティン・ブーバーの対話哲学」
　講師　金子美由紀(1997年度卒業生、写真)
　「大学で学ぶべきこと・
　　目指すべきこと」

　公開講座(新発田)（第8回）
　講師　松本ますみ 助教授
　「中国におけるイスラーム文化」
　リトリート（～14日まで）
18日　企業との就職懇談会／ホテル新潟
20日　チャペル・アッセンブリー・アワー㉒
　説教　延原時行 宗教部長「信仰って何のため？」
　講師　松本ますみ 助教授「私と歴史学」
　公開講座(新発田)（第9回）
　講師　中村義実 専任講師「町(街)としてのワシントン」
22日　推薦・社会人入学試験
25日　第1回 業界研究会
　教授会
26日　理事会
27日　チャペル・アッセンブリー・アワー㉓
　説教　延原時行 宗教部長「ビックバンとあなた」
　講師　福王 守 専任講師「私と国際法との関わり」

12月

2日　推薦・社会人入学試験 合格発表
　敬和フォーラム
　講師　孫野義夫 教授（写真）
　「言語学の問題点」
　第2回 業界研究会
4日　チャペル・アッセンブリー・アワー㉔
　説教　松井愛美 十日町教会
　　牧師・学園理事
　「共に歌おう
　　クリスマス・キャロル」
9日　教授会
11日　チャペル・アッセンブリー・アワー㉕
　説教　永野茂洋 助教授「シメオンの祝福」
14日　後援会役員会
16日　就職内定者と3年次生との懇談会
18日　クリスマス行事
19日　大学・高校クリスマス合同研修会
24日　就職対策講座Ⅰ（1日目）
　冬期休暇（～1月7日まで）
25日　就職対策講座Ⅰ（2日目）

1999年 1月

4日　集中講義期間（～1月7日まで）
8日　講義再開

発行所/敬和学園大学 〒957-8585 新発田市太字富塚1270番地 TEL 0254-26-3636(代)